

## 紅型の型紙と型彫り

—城間栄喜ノートをもとにして—

渡名喜 明\*

### 1. 渋のつくり方

現在では市販されている渋紙を使うが、明治時代後半から大正年間にかけては、奉書紙に渋を塗り、型紙として使用することがあった。

まず渋の作り方から説明しよう。沖縄本島北部国頭地方でとれる柿（アガリカチ）を碎いて同量の水を加える。これを2合か3合入りの瓶いっぱいにつめて蓋をし、冷暗所に保管しておく。渋は空気にふれると変質して固まるので、量が少ないときは水を加えて瓶いっぱいにしておく。2年または3年おいた渋が使いやすい。本土から来た市販の柿渋も使えたが、沖縄の柿渋が安くついた。

### 2. 渋引き

奉書紙を表に上にして台板にのせる。つぎに柔かい刷毛に渋を含ませ、刷毛をななめに倒して渋を引いていく。このとき刷毛を逆方向に戻してはならない。そうすると紙が毛羽立つからである。表一面に渋を引いたら、渋が滲みて奉書紙が台板にはりつかないように奉書紙をずらして乾燥させる。もし奉書紙が台板にはりついてしまったら、その部分に湯をかけるとたやすくはがれる。

渋は市販されている型紙より薄目に塗る。片面が乾くまで渋刷毛は水につけておく。渋がついたまま刷毛を空気にさらしておくと、渋が固まって刷毛が使えなくなるからである。表が乾いたら裏を返して同じ操作をくり返す。表裏ともに渋を引いたら陰干しにする。渋を塗るのは型を彫るのに適当な固さにすると同時に、紙に弾力と耐水力、耐久力をつけるためである。渋の状態によってはもう一度表裏両面に渋を塗ることがある。2度目は戻し刷毛をしてもかまわない。

1度から2度渋を引いた状態を半渋と呼ぶ。この時点では紙の色はハトロン紙の色に近い。半渋にしておくのは、下絵を描くとき線が見えやすいようにしておくためと、型が彫りやすい固さにしておくためである。

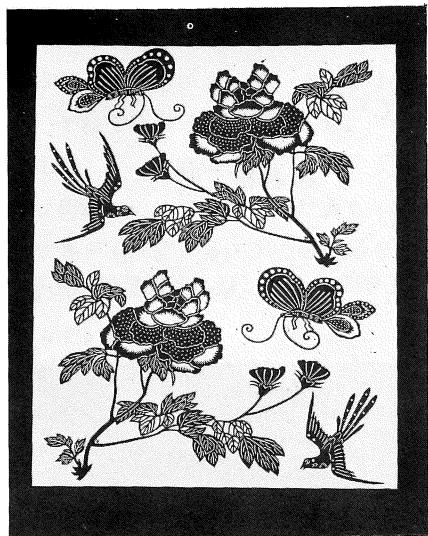
半渋の型紙に下絵を描いたら型彫りにかかる。模様によっては型彫りの後で吊り糸をかける。おもに、地を彫り落とし、模様の部分を残す「白地型」の型紙に糸掛けをするが、模様の線<sup>(写真1)</sup>を彫り落とし、地を残す「染地型」の型紙でも、大きく彫り落とした箇所<sup>(写真2)</sup>は糸をかける。糸を掛けたら渋引きを1度か2度くり返す。これは型彫りの後のくせを直し、紙の表裏の状態を同じにしておくためである。

渋塗りは、型紙を水につけて10分から20分経過したときに水が紙に滲み通る程度にしておくのがよい。渋が適度に塗られていると、着尺1反分ぐらいは、糊が乾かないうちに全体に「型置き」ができる。「型置き」とは、生地に型紙を置き、その上に糊を一面に置くことである。

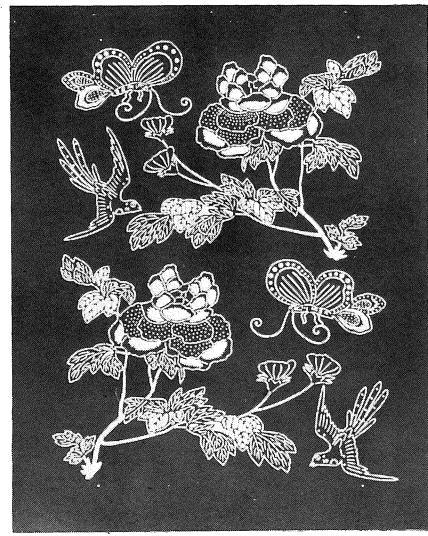
### 3. 型紙の大きさと重ね彫り

全紙大の奉書紙をそのまま使う型紙を「ウフカビ」（大紙）、その半分大の型紙を「ハンメーグワ<sup>(写真3)</sup>

\* (となきあきら 学芸員)



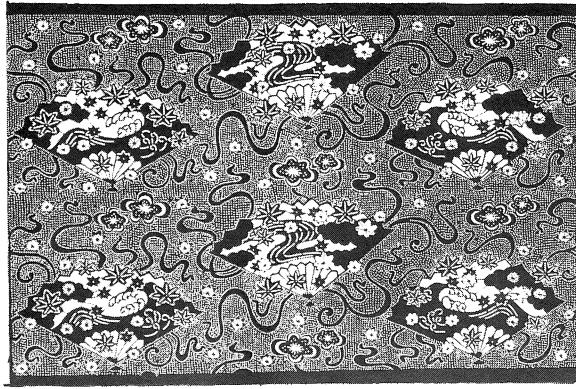
(1) 白地型の型紙：この型紙は糸掛けではなく紗張りをしてあるが、写真には紗は写っていない。



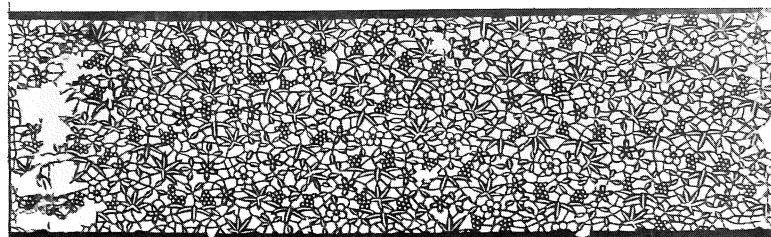
(2) 染地型の型紙：(1)と同じ模様を染地型として膨ったものである。



(3) 「ウフカビ」：踊衣裳の袖に施される模様である。写真(6), (7), (8)の型紙と組み合わせることによって全体の模様ができる。



(4) 「ハンメーチー」の型紙：染地型。柄の大きさは「ナカティー」。



(5) 「サンメーチー」の型紙：柄の大きさは「クムムン」。「サンメーチー」の型紙に「ナカティー」の柄が膨れることもある。

—」（半枚もの）<sup>(写真4)</sup>、3分の1の大きさの型紙を「サンメーヴー」（3分の1もの）と呼ぶ。彫る柄の大きさは型紙の大きさにほぼ比例する。大柄を「ウフガラ（ウームヨー）」（大柄、大模様）、中柄を「ナカティー」（中手）、小柄を「クムン」（小紋）と呼ぶ。全紙大の型紙に入らない模様は、「ウーカビ」（上紙）<sup>(写真6)</sup>、<sup>(写真7)</sup>「ナカカビ」（中紙）<sup>(写真8)</sup>と称する型紙を上または下につけたす。「ウーカビ」、「ナカカビ」の大きさは模様にもよるが、ふつう奉書紙の3分の1から半分の大きさである。大柄、中柄の模様は厚手の紙に彫り、小柄の模様は薄手の紙に彫る。

型を彫るとき、2枚から4枚紙を重ねて彫る場合がある。たとえば、つけさげにする着物地の場合は、2枚の型紙を必要とすることがある、また予備の型紙をとっておくこともあるからである。王国時代には、王府や上流士族注文の型紙は生地を染めあげた後は没収されるので、無断で同一種の型紙を重ねて彫り、子孫のために残したこと也有ったという。薄手の紙は5枚も重ねて彫ることがあった。

#### 4. 「ルクジュー」のつくり方

「ルクジュー」とは型を彫るときの下敷にするものである。豆腐を乾燥させてつくる。「ルクジュー」は型彫りのときに微量の油を出すので小刀（シーグ）の刃を痛めず、また油が錆止めにもなる。

縦10cm、横9cm、厚さ3cm程度の豆腐を形が崩れないように吸収紙、馬糞紙、布裂などに置いて平らなところに静置して水分を十分に吸収させる。豆腐は厚すぎると腐りやすく、薄すぎると乾燥後変形しやすい。1週間ほど経過したら豆腐を平らなザルに移して風通しのよい所で蔭干しする。冬は天日に干してもよい。雨天が続く日はカビをさせないように冷蔵庫に入れておくが、凍らせないように気をつける。10℃前後が適温のようだ。

豆腐の表面にカビを生じたときは刷毛で軽くホルマリンを塗ってふきとるが、カビを生じさせないようにすることが肝心である。そこで昔は大寒に入つてから「ルクジュー」をつくったものである。箱に入れて乾燥させるとカビがつくことがあるので、紐につるして乾燥させることもある。そうするとネズミ除け、ゴキブリ除けにもなる。

しばらくおくと豆腐は隅の方からしだいに黄ばみ、2週間ぐらいたつと固くなってくる。20日から1ヶ月も経過すると豆腐は「ルクジュー」として使える固さになる。ただ、乾燥して固くなった豆腐はいびつになつてるので、両面を削つて平らにして使う。できあがつた「ルクジュー」は当初の豆腐より長さ、厚さともに3分の2ほどの大きさに縮小している。型彫りで下敷となるのは、「ルクジュー」の中央部約3cm直径の部分であるから、長く使用するとそこだけにくぼみができる。そのときは周囲を鉋で削つて平らにして使う。<sup>(写真9)</sup>

「ルクジュー」が型彫りの下敷に適している理由は、まず適度な固さと復元力があって、刃の痕があまり残らないうえに、繊維がないので小刀の刃を自由に動かせること、削つて使えること、刃の錆止めの効果もあることなどである。

「ルクジュー」はときどき天日に干したり、カビが生じたときは布か柔かい紙でふきとつたりすれば保存がきく。天気のよい日が続くと「ルクジュー」は硬くなるので、型彫りの1時間ぐらい前に水をつけ、柔かくしてから使用する。表面に油を塗ると乾燥しないので、この方法も保存方法と

してよい。

ところで、「ルクジュー」とは紅型の型彫りに使う下敷固有の名ではない。大きさ約4cmから5cm、厚さ1cmぐらいの豆腐を火にあぶってきつね色になるまで焼き、それを2つ重ねて長寿の祝いや正月の祝膳に沿えるものも「ルクジュー」と呼んでいた。琉歌に

六重重にりば百二十ぬうとうし  
むち  
百といちまでいん むていさけい

(六十を重ねたら百二十の御歳 百を重ねるようにいつまでも 栄えに栄えて)

とあるが、2つ重ねると120になるということで「ルクジュー」と呼ぶのである。

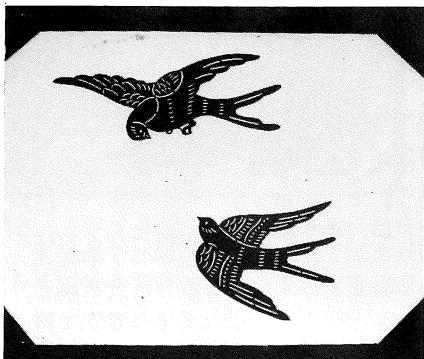
豆腐を利用した下敷がいつの時代から紅型の型彫りに使われたか不明である。中国や日本本土で食物を型彫りの道具に応用した説は聞かないので、沖縄独自の方法だと思われる。



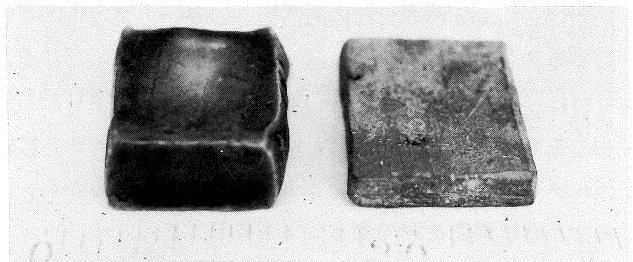
(6) 「ウ ワーカビ」



(7) 写真(6)の「ウ ワーカビ」の下に続く型紙で、この下に写真(7)の「ナカカビ」が続く。



(8) 「ナカカビ」：この型紙の下に写真(3)の型紙の模様が続く。



(9) 「ルクジュー」：右が使用可能な「ルクジュー」で、左は2週間ほど置いた豆腐。

## 5. 小刀（シーグ）の作り方

型彫り用の小刀を「シーグ」と呼んでいる。その刃は金切鋸の刃を利用してつくる。金切鋸の細長い刃を利用してつくる。金切鋸の細長い刃を固い木の上にのせ、物差などを使って刃の幅の半分

を押さえて固定させる。幅5mmぐらいのたがねの刃を、固定した金切鋸の刃の中心線にあて、金づちで端の方から軽くたたいていくと、金切鋸の刃は縦半分にきれいに割れる。半分に割れた刃の一方を刃渡りが1.5cmぐらいになるように斜めに切り落とす。それから、もう一方の端を刃先からの長さが5cmぐらいのところで切り落とす。

柄の材料として竹箸かヤール幅用の伸子を用意する。それをまん中から裂き、刃先が1cmから1.5cmぐらい出て残りがかくれる程度に刃をさし込む。柄にさし込む長さは3.5cmから4cmということになる。刃が動かないように刃のつけ根から5cmぐらいのところまで、柄に糸を強く巻いて固定させる。つぎに刃をとぐ。刃の中ほどをグレンダーか荒砥石で強くとき、刃の線を凹状にする。これを合わせ砥でといで仕上げる。刃の線を凹状にするのは、直線や曲線を切ったり、孔を彫るときに中くぼみがあった方がスムーズに刃が動くからである。2mmから3mm程度の孔は小刀で彫ることができるが、それより小さい孔は後で述べる「アラレグワー」で彫る。

(写真10)

## 6. 「アラレグワー」の作り方と使い方

「アラレグワー」は「アラレ」「霰」と呼ばれる小孔を彫る道具である。「アラレ」は小紋の他に花芯、松の枝、雲、霞、山、「染地型」の地などに施される。「アラレグワー」の刃には○型と□型があるが、○型がよく使われる。刃の直径は0.5mmから2mmぐらいまで4～5種類ある。2mm以上的小孔は小刀で彫る。

「アラレグワー」の長さは7cmから8cmで、戦前から戦後にかけて洋傘の骨を利用して作った。戦前は柄をつけることもあった。傘の骨の一端をそのまま丸くすると、直径2mmぐらいの「アラレグワー」を作れるが、それより径の小さいものはやすりで削って作る。径の大きさによって針や針金、細い釘などをはさんで小さな金づちでたたき、先を丸くする。それから焼きを入れる。まず刃になるところをローソクの火で熱し、その部分だけ急に水に入れて冷やす。その後やすりで荒くとき、砥石で仕上げる。

(写真11)

「アラレ」を彫るときは「アラレグワー」を垂直に立てる。指でひねりまわしながら彫るが、型紙を重ねて彫るときは小さな金づちで打つこともある。とくに紙を重ねて彫るときは垂直に立てて彫らないと上下の紙の図柄に狂いが生じ、両面型置きのときに表と裏の模様が合わなくなる。そこで、小紋や細い模様の「アラレ」は重ねて彫らないで下絵に合わせて1枚づつ彫る場合もある。

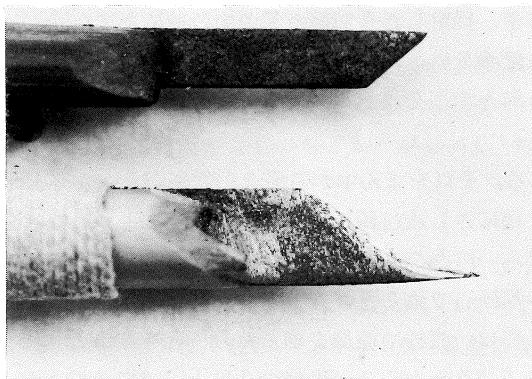
「アラレ」を彫った後の型紙の裏には型彫りの跡が残っているので、電球か湯のみ茶碗でこすってくせを直す。

最近は自分で作らず、本土から来る既成品を使用することが多い。

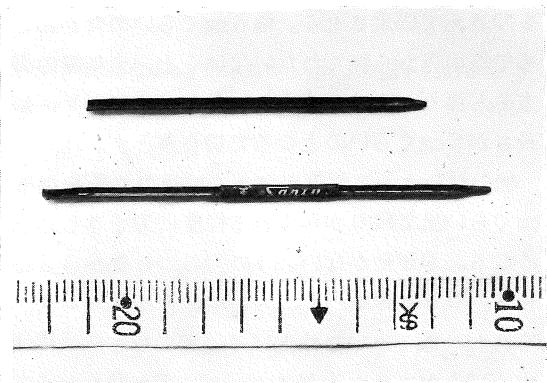
## 7. 型彫り

紅型の型彫りは突き彫りで、刃を前に向けて彫る。<sup>(写真12)</sup>とくに型紙を重ねて彫るときはどうしても突き彫りでないと彫れないようだ。また、細い模様も突き彫りの方が彫りやすい。

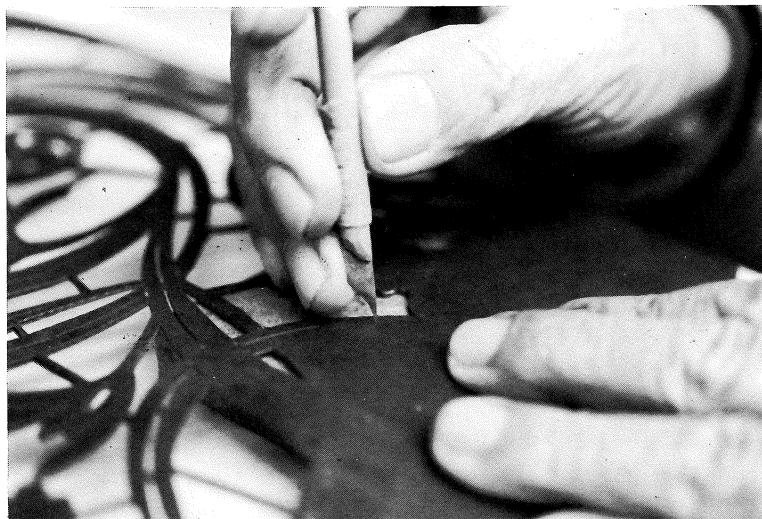
戦前は、型紙を重ねて彫る場合、上下の紙にづれやたるみができるないように止め紙をつけた。型紙の切れはしで底辺が5mm、長さ5cmぐらいの縦長の三角形の紙を作る。それから下絵を描いた型紙の四隅と中間、模様によっては図柄か地の一部に2本から3本の切れ込みを入れ、その穴に止め紙を通して型紙を固定させる。それから型を彫る。現在では糸を使って固定するが、昔は糸も貴重品なので、捨てる紙を利用したのである。ただし、そればかりでなく、糸にくらべて止め紙は幅があるので、固定する効果も大きかった。



(10) 「シーグ」：下が紅型用の「シーグ」で、刃が凹状になっている。上は本土製の型彫り用小刀である。

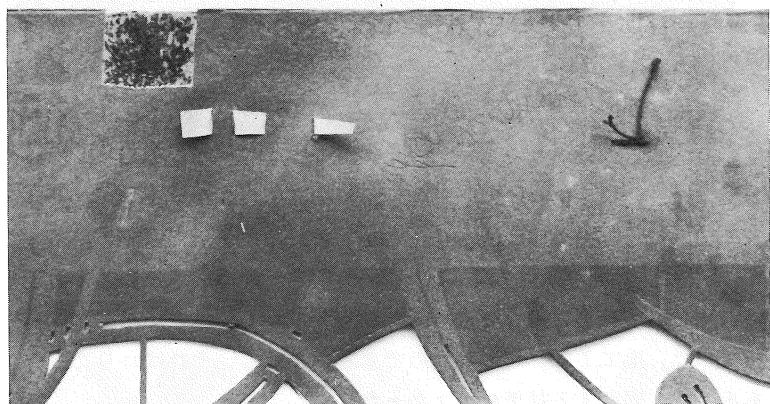


(11) 「アラレグワー」：傘の骨でつくったもの



(12) 型彫りにおける小刀の持ち方。

(13) 左が止め紙。城間氏が見本としてついたものである。右は止め糸。



糸で固定するとき、糸は同じ穴を通し、2回返し縫いして縫い止めする。運針の幅は1cmぐらいにし、図柄にかかるところで縫い止めする。型彫りの後、紙のくせを直すために水につける。そうすると止め紙を通した切れ込みの線や糸を通した孔はふさがってしまう。

(写真13)

型紙の縁を「イン」(縁)と呼び、模様の上の縁を「メーイン」(前縁)、下の縁を「アトウイン」(後縁)と呼ぶ。上下の縁を前後の名で区別するのは「型置き」の際、上の縁が前、下の縁が後に来て順に型を置いていくからである。左右の縁を「ミミ」(耳)と呼ぶ。「イン」と「ミミ」の大きさは、型紙や模様の大きさによって多少の違いはあるが、前縁で3cm、後縁と「ミミ」が4cm前後である。「型置き」は前縁から後縁の方向に向かうので、余分の糊をとりやすくするためと型紙の上下をわかりやすくするために、後縁の幅は前縁の幅より大きくなっている。

戦前は糸で図柄を吊って固定したが、今は片面に紗を張って固定するので、それだけ紙を引きつる力も強くなった。それで、戦前の型紙にくらべて最近の型紙は「イン」や「ミミ」の幅が大きくなっている。

型彫りの線を「ユー」(陽)と呼び、図柄を彫るときはまずこの「ユー」から彫っていく。また、型は中央の図柄から彫っていく。周囲から彫っていくと、中央部に移るにしたがって先に彫った部分が袖にかかる恐れがあり、また周囲を彫ってからでは紙が固定せず中央部が彫りにくくなるからである。

とくに「白地型」の型彫りの場合、小鳥や花など空間に点在する図柄はつなぎによって型紙に固定しておき紗張りの後で切り落とすが、図柄の配置上つなぎの一部を残して模様の一部とすることがある。図柄は「ユー」から彫り始めること、型紙は中央部から彫っていくこと、つなぎの一部を模様にくみ入れることなど、いずれも仕事が教えた知恵の一部である。

型彫りを終えると、型を彫るときにできた紙ののびちぢみを直すために型紙を水にひたす。とくに連続模様の型紙や両面染めの型紙は水にひたして後古新聞にはさみ、重石をして、型彫り後の紙のくせを直すようにする。これは型にづれがこないようにするためである。連続模様の型紙とは、型をつないでいくことによって全体の模様ができあがるもので、これに対して型紙1枚で模様が完結しているものを単独模様といって区別する。

## 8、「ミー」(目)と「クチ」(口)

連続模様の型紙は、模様の上端と下端を正しくつなぎ合わせるように「型置き」をしなければならない。そこでつなぎを正しくするために、連続模様の型紙には「アティミー」(当て目)とか、「アティグチ」(当て口)と呼ばれる型送りの目印をつける

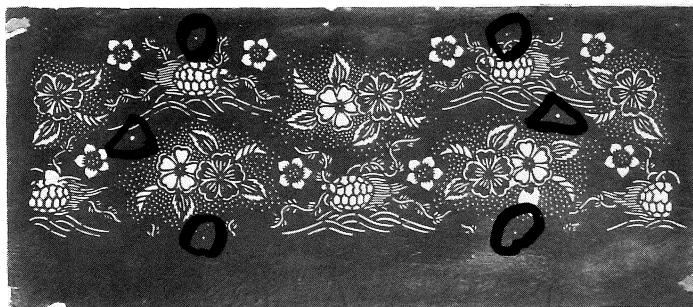
「アティミー」とは「染地型」の型紙につくられるもので、前縁と模様の境目、後縁と模様の境目にそれぞれ2ヶ所、小刀や「アラレグワー」でつくられる小孔のことである。

(写真14, 15)

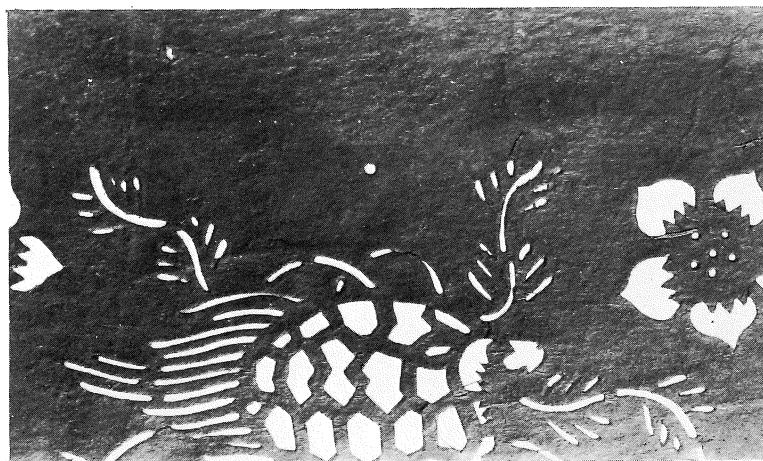
いわゆる送り星である。「型置き」のときはこの小孔を順次当てながら模様をつないでいく。

「アティグチ」は「白地型」の型紙に施される。後縁と模様の境界線の地の一部を2ヶ所余分に後縁に彫り込むことによって、前縁の方の模様と合わせる。「アティグチ」をつくることを「クチワイン」(口を割る)といい、その型紙を「クチワヤー」(口が割られたもの)と呼んでいる。

(写真16, 17)

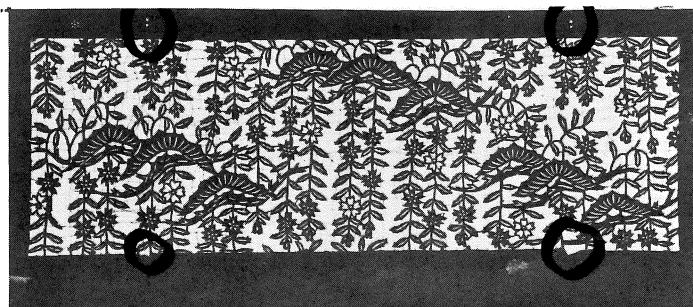


(14) 「アティミー」：○で囲んだ小孔が「アティミー」である。



(15) 写真(14)の「アティミー」を拡大して写したもの。左上の「アティミー」である。

(16) 「クチワヤー」の型紙：後縁（下の縁）の○で囲んだ部分が「アティグチ」である。



(17) 写真(16)の型紙の右下の「アティグチ」を拡大して写したもの。



模様によっては「アティミー」や「アティグチ」の位置がわかりにくいことがある。こういう場合は、前縁の側の「アティミー」あるいは前縁の「アティグチ」とつながる箇所の上部に「アラレグヮー」で1~3個の小孔をあけ、目印とすることがある。この目印のことを「シルシミー」(印目)と呼ぶ。  
(写真18)

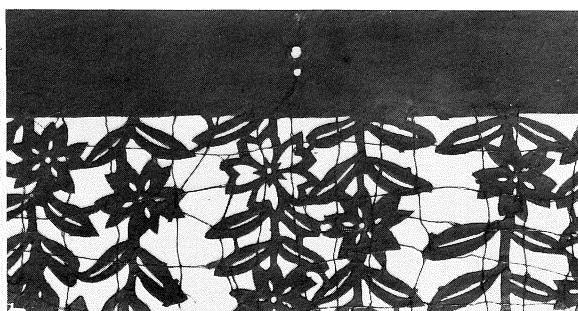
「アティミー」や「アティグチ」の他に「ヌチミー」(貫目)と呼ばれるものがある。同じ型紙で両面を染める場合に表裏の模様を正しく合わせるために目印である。「染地型の型紙につくられる。両面を同じ型紙で染める場合は、糊に藍と呼ばれる顔料料を加えて色をつけることによって、裏の「型置き」を容易にする工夫がなされるが、「染地型」の場合はそれだけでは両面の模様を合わせるのがむつかしい。そこで、地の左右斜めに2ヶ所小孔をあけ、片面の「型置き」の後でその小孔に錐をあてて生地にくぼみをつくる。そして裏の「型置き」のときそのくぼみを目印にして糊を置いていくのである。「白地型」の型紙には「ヌチミー」はない。

「アティミー」、「アティグチ」いずれも図柄の一部で代用することがある。また図柄の一部ではなく、別につくった「アティミー」や「ヌチミー」は「型置き」後につぶしてその箇所を顔料や染料で色差しをして修正することもないではないが、例は少ない。図柄と関係のないところに「ミー」の白い痕が残る結果になるが、それにこだわらないところが紅型の大らかさを表わすことにもなっている。  
(写真22)

なお、単独模様の型紙には「アティミー」も「アティグチ」もつくらないのがふつうである。単独模様の「型置き」は目測と型紙を持つ指で型をつないでいく。この方法を「チチャーサー」(つき合わせ)と呼ぶ。またこの種の型紙を「チチャーサー」と呼ぶこともある。ときたま「染地型」の「チチャーサー」には「アティミー」がつくられることがある。もちろん、「チチャーサー」の型紙でも表裏両面を染める場合には「ヌチミー」がつくられることがある。

## 《あとがき》

本稿は昨年度から始めた城間栄喜氏からの聞き書きの続きをまとめたものである。昨年度の分は「藍型(イエガタ)」の技法—城間栄喜氏からの聞き書きをもとに—と題して『沖縄県立博物館紀要』第3号に発表した。型紙の種類(「白地型」、「染地型」など)については前稿でくわしく記述したので、本稿では必要最小限の記述にとどめた。前稿とあわせて読んでもらわればさいわいである。次年度は「型置き」から色差し、仕上げまでの工程についてまとめてみたい。



(18) 「シルシミー」：写真(16)の型紙の右上の「シルシミー」である。

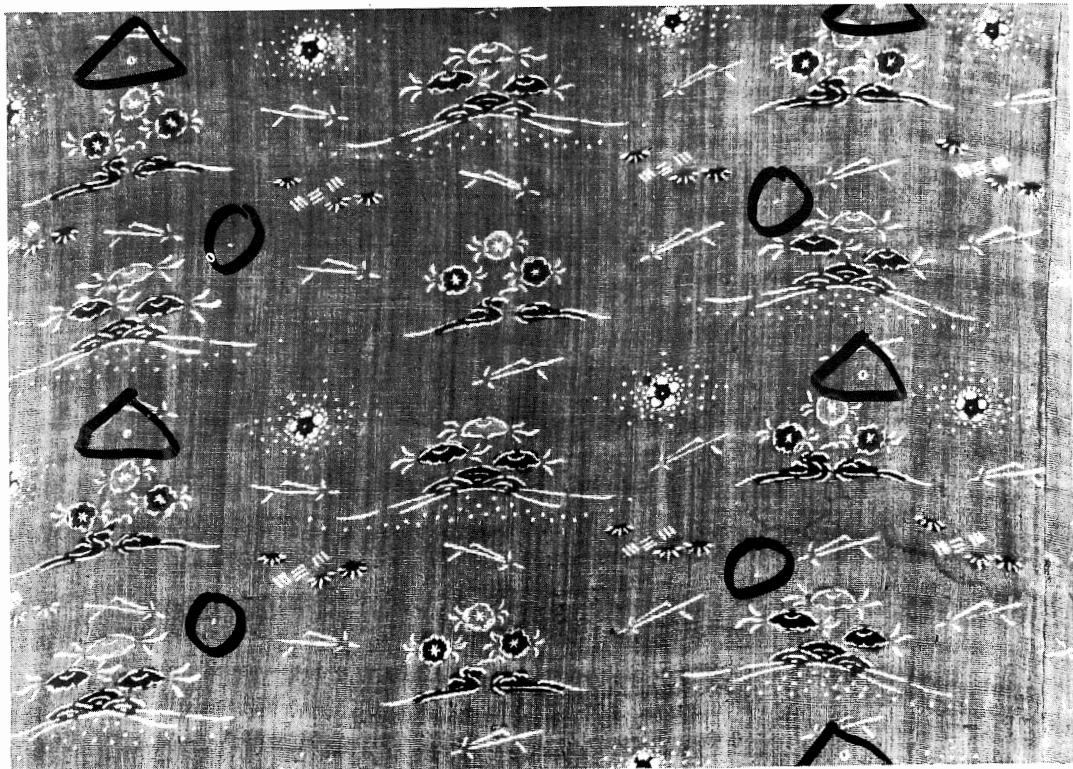


(19) 「ヌチミー」：写真(14)の△で囲んだ小孔が「ヌチミー」で、この写真は左側のヌチミーである。

(20) 後縁（下の縁）に前縁の楓とつながる「アティミー」が施されている。



(21) 写真(20)の左側の「アティミー」と「シルシミー」である。



(22) 「アティミー」と「ヌチミー」：県立博物館蔵の紅型である。○で囲んだ小孔が  
「ヌチミー」である。